平成20年８月１日
（2008）
第87号
毎月発行
編　集
公民館だより編集室
発　行
西東京市公民館

西東京市 公民館だより

田無公民館
南町5-6-11
TEL 461-1170

保谷公民館
柳沢1-15-1
TEL 464-8211

芝久保公民館
芝久保町5-4-48
TEL 461-9825

ひばりが丘公民館
ひばりが丘2-3-4
TEL 424-3011

谷戸公民館
谷戸町1-17-2
TEL 421-3855

保谷駅前公民館
東町3-14-30
TEL 421-1125

今 平和かな？

平和について考えよう！

皆さんは「今、平和だ」と感じていますか？地域の若い世代の学生たちは、いったいどのように感じているのでしょうか。今回は、市内にある武蔵野大学の現代社会学部の学生（８人）に、「平和」について、広い視野で話し合っていただきました。

◆世界に目を向けて

「日本は今平和で、自分も平和に生活していると感じている。でも、世界に目を向ければ、決して平和とは言えない」

「平和だと思うが、平和に慣れ過ぎて、危機意識が足りないと思う。あのイラク戦争も日本人から見れば、他人事のように見えていたのではないか」

中国人留学生の章曙（しょうしょう）さんは、別の視点から語ります。

「20世紀前半、日本と中国は戦争をしていました。しかし今は国の間に貿易も進み、今の生活は平和だと思います。私は留学生として、日本人はやさしいと思いました。でも、周りの友だちを見ていると、たとえば、ミャンマーのサイクロンやタイの津波、中国の地震に対しても、自分に直接関係がないと、あまり関心を持たないというところもあります。これは決して日本人だけではなく、中国人もアメリカ人も同じです。外国への援助というのも平和につながると思います」

◆日本では・・・

「他者との関わりが少ないから、孤独感が生まれて、秋葉原のような事件が起きてしまうのでは？」

「秋葉原の事件は、孤独感というより、ある意味、格差社会の象徴なのではないかと思う」

インターネットや携帯電話の是非についても意見が出されました。

「インターネットや携帯など、人と人とが、顔を見ないでコミュニケーションをとれるようになったが、そういうことが孤独感につながって、犯罪が増えているのだと思う」

「自分は逆にインターネットや携帯で友だちが増えたし、ただ単に否定するのは良くない。それをどう活用するかという使い方の問題だと思う」

後者の意見が複数出され、インターネットや携帯電話のすべてが悪につながるわけではなく、使い方やモラルの問題だととらえている学生が多いことがうかがえます。

◆平和のためにできること

「私は、いろいろなことに関心を持つことが大事だと思う。日本は今平和で、この生活が当たり前のように思っている人が多いけれど、周りの世界を見て、関心を持つことで、気づくことがたくさんあると思う。その気づきが、さまざまな活動につながっていくのでは？」

お互いに国がちがえば教育もちがい、同じ戦争についても、それぞれの認識が微妙にちがうことも見えてきました。

「国と国が友だちのように仲良く付き合うためには、宗教も政治もひとつにした方がよいのでは？」

「ひとつにする必要はないと思う。人がちがえば考え方がちがうのは当然のことで、他者とのちがいを理解した上で、認め合うことが大切なのでは？」

「こうしてお互いが自由に意見を言い合えるということも、平和だと思う」

◆座談会に参加して…

「今まで、あまり平和について話したことがなかったので、平和について考えるきっかけになり、何かしてみようという気持ちになった」

「平和といっても戦争がなければ平和なのか、自分で考えても難しかったけれど、一人ひとりが情報や新聞に目を向けて出来ることはやっていこうと感じた」

「平和について考えるきっかけを得られたので、今度は私自身が友だちに対して、きっかけを作っていきたいと思う」

「今日は、一人ひとりがしっかりした考えを持っていることがわかって良かった。それぞれのちがいを認め合いながら共存していくことの大切さが見えました」。

皆さんもぜひこの機会に、「平和」について考え、周りの人たちと語り合ってみませんか。

サークル訪問

戦闘体験ヲ語ル会

先の大戦で各地の戦場に赴き、極限状況を乗り越えて、今、西東京市に暮らしている人たちがいます。兒矢野（こやの）さん、野中さんはその中の2人です。体験を語る場が持てないか、と市役所の秘書広報課に相談し、公民館を紹介されました。そしてさる5月4日㈰、「旧軍人の集い」を開催しました。「集い」には8人が参加しました。

その参加者も含めた2回目の集まりが、6月15日㈰、田無公民館で行われました。この日の出席は6人。平均年齢は85歳と年々高くなります。野中さんの司会で、兒矢野さんが従軍の記憶を語ります。

兒矢野さんは昭和16年12月、教育召集令状を受け入隊しました。さらに昭和17年5月、南海派遣軍衛生兵として召集されます。出発前、2泊の外泊を許され、上官から

「思い残すことのないよう」

と言い渡されました。

5月末にガダルカナルに到着。しかし戦局は日本軍にとって芳しくなく、「転進」という名の退却を余儀なくされます。米も底をつき、わずかな乾パンや、原地の人から差し入れられるバナナやパイナップルで飢えをしのぎました。

戦闘ができるような状況ではなく、銃の火薬を海に投げ込み、熱帯魚を塩焼きにして食べもしました。

サソリに刺されて命を落とした人、そしてもちろん爆撃で亡くなった人も。

「何人病死して何人戦死したかさっぱりわからなかった」

と兒矢野さん。命からがら広島県の大竹港に帰還しました。

永添さんも語ります。昭和18年3月、平壌の陸軍病院に衛生兵として応召します。終戦後、なんとコーカサス山脈（現在のグルジア共和国）のクタイシという町に抑留されます。

「これで自分は、終わりだ…。と思う瞬間が何度かありました。しかし、それをかいくぐってきたのだから、何事にも我慢すればどうにかなるだろうと思えるようになりました。戦争を体験した自分たちだからこそ人命を大切にしてほしいと今の人たちに言いたいです」と野中さん。

「平和なはずの今、いとも簡単に人を殺してしまう、そんな事件が相次いでいる。どうなっているんだろう」

会員の内山さんが呟いた言葉が印象的でした。

連絡先　兒矢野☎461・1836／野中461・0675